

(2024年3月20日)

## 第45回 赤松小三郎研究会のご報告

日時： 2024年2月10日(土) 14:00～16:30  
場所： 文京シビックセンター 4階B会議室  
出席者： 14名 (+Zoom参加1名)

### 【配布資料】

資料-1 赤松小三郎研究会設立10周年記念事業等の実施状況について(報告)～滝澤進さん  
資料-2 第10回赤松小三郎講演会の報告～西澤澄雄さん  
資料-3 赤松小三郎と佐久間象山たち～芦田雄樹さん  
資料-4 「赤松小三郎エッセイ賞」について(報告)～滝澤進さん  
資料-5 「赤松小三郎エッセイ賞」受賞者5名の作品

### 【内 容】

#### I. 第10回赤松小三郎講演会の報告(報告者：西澤澄雄さん)

##### <講演会の概要>

日 時：2023年11月26日(日) 14:00～16:40  
場 所：日比谷図書文化館地下1階コンベンションホール  
参加者：103名(上田高校同窓生24名、一般79名)  
演 題：『幕末政治と赤松小三郎』  
講 師：町田明広氏(神田外語大学教授)

##### <報告の要旨>

#### 1. 人物研究のポイントとは

- ① 歴史の叙述とは、執筆者による「解釈」に基づいたもの
- ② 人物の叙述においても、執筆者それぞれの研究成果から導き出された「解釈」を基に叙述
- ③ 分析視角として、思想や行動をその人物の個性のみに求めるのではなく、それらを規定した同時代の秩序・観念や政治・経済・社会・文化といったすべての生活領域に及ぶ規範から、人物を丁寧に説き起こすことを意識
- ④ 伝説化された人物には、政治史と人物像の乖離を正しく認識し、人物把握と政治史との照合を丹念に行い、政治史における人物評価をやり直すことによって、歪んでしまった政治史に矯正を施す必要
  - ・ 赤松小三郎という人物は、歴史に埋もれた人物の典型的な例。
- ⑤ こうした分析視角・研究手法を用いて、人物研究を行うことによって、政治過程そのものの検討を深化させることができると確信

#### 2. 赤松小三郎の一般的理解

- ① 幕末維新期の重要人物にもかかわらず、ほぼ知られていない実態。極端に過小評価された人物
- ② “知られざる偉人”となった背景として、慶応3年と言う早い時期に暗殺されたこと、犯人が薩

摩藩士であったことなどから、歴史に埋没し、その功績は坂本龍馬等に横取りされたため

- ③ 本講演の目的は、赤松小三郎の人物像を先行研究に留意しながら再度点検し、その事績を検証しながら、幕末政治史の中で再度位置づけること。その際、「建白七策」から政治（変革）家との側面が強調されるが、軍事戦略家の側面を再確認すること

【本講演の目的】（下記は詳細。講演会資料から引用）

- 赤松小三郎の人物像を、先行研究に留意しながら再度点検し、その事績（今日的な意味では業績）を検証しながら、幕末政治史の中で再度位置づけたいということ
- その際に、「建白七策」（慶応3年に赤松が将来の国家構想を建白したもの）を建白した政治変革家との評価については、触れることはあるが、むしろ赤松の軍事戦略家としての側面を再確認したい

### 3. 赤松小三郎の生い立ち

- ① 天保2年（1831）4月4日、上田藩士芦田勘兵衛（家禄10石3人扶持、藩校明倫堂の句読師）の次男として城下・木町で生まれ、幼名は清次郎、兄は柔太郎
- ・上田藩に生まれた生い立ちが今回の講演のキーセンテンスとなる→老中を出す譜代小藩上田藩で、赤貧の下級藩士に生まれた事実は、その後の赤松小三郎を規定する最重要要素。
- ② 藩校に通いながら、叔父の藩士植村重遠から和算（数学）を兄とともに修学
- ・嘉永元年に、藩士の森田斐雄と一緒に江戸遊学を開始。幕臣で和算の大家である内田弥太郎の塾、瑪得瑪第加（マテマチカ）塾で、測量・天文・暦学・地理・蘭学を幅広く5年間ほど学ぶ。
  - ・嘉永5年に、内田の紹介で、幕臣で高島流砲術家の下曾根のもとで蘭学、砲術を修得する。この下曾根との出会いというのも一つの転機で、兵学を志す赤松の起点になったといえる。
  - ・長期間の江戸での修学は、赤松がいかに優秀であったかとの証左であり、同時に、藩の期待もかなり大きかったと思われる。
- ③ 安政元年（1854年）、一旦帰藩し赤松家（10石3人扶持、下級藩士）の養子。数学助教兼操練世話役に登用。
- ・家督相続前の数学助教兼操練世話役への登用は、この段階での上田藩による赤松への非常に大きな期待があったことをうかがわせる。

### 4. 勝塾入門と長崎海軍伝習所

- ① 安政元年、更なる兵法修学のため、再度出府。上田藩士山田貫兵衛（西洋流砲術世話役）の長男純一郎が海舟門下生であり、その仲介で勝海舟の兵学・蘭学塾に入門
- ・上田藩士の山田貫兵衛の長男、純一郎が海舟門下生だったことで、その仲介で海舟の兵学・蘭学塾に入門。
  - ・安政二年に、長崎海軍伝習所の一期生になる勝海舟に上田藩から依頼をし、赤松は勝の従者として幕府の軍艦昌平丸で、海路長崎入りをする。
- ② 勝の内侍として員外聴講生の資格で語学、航海、造船、数学、測量、砲術等を学修。長崎遊学のため上田藩から組付御徒士（2人扶持支給）拝命

- ・ 上田藩が赤松の長崎行きを許した背景として、老中松平忠固の存在というのを意識せざるを得ないと思われる。推測の域を出ないが、藩主に松平忠固という、老中をやるような非常に開明的な藩主がいたことが、赤松の派遣につながったのではと考えている。
- ③ 安政4年(1857)3月、海軍ではなく、陸軍を選択したため、勝の許を辞して小笠原鐘次郎(書院番戸川伊豆守組)の従者に転身
  - ・ ただし、上田藩が赤松に課したのはむしろ陸軍の知識修得(長崎海軍伝習所はその名の通り海軍について主に学ぶところ)。赤松も藩の意向を受けて、陸軍の方にシフトをしていく。
  - ・ このこともあり、結果的には勝のもとを離れる。その後、小笠原鐘次郎の従者に転身をするため 勝とこの時に、関係が切れてしまったということで、この後、遣米使節団に赤松が参加できなかった大きな要因になっているのではと私は考える。
- ④ 長崎での約5年間で、74冊の蘭書読破。語学力の著しい向上と銃火器・軍馬への強い関心
  - ・ 長崎滞在中の約5年間に、赤松は74冊の蘭書を読破したとされており、卓越した語学力を持っていたとみられる。数学ができるうえに、語学がちゃんと出来るという点、オランダ語をマスターして、その後に英語もマスターする。そのぐらいの語学力を持っていたということ。
  - ・ 赤松は語学を介して銃火器であるとか軍馬などに関心を寄せていくことになる
  - ・ 安政4年の7月に、オランダ語の原書を「新銃射放論」として翻訳。
  - ・ 安政5年に、軍馬、馬術について書かれたオランダ語の原書を「選馬説」として翻訳。
- ⑤ オランダ水陸軍練兵学校の教科書(1853年版)を翻訳した『矢ごろのかね 小銃穀率』(銃隊の教練法なども含む小銃についての専門書)を借財して自費出版
- ⑥ 『矢ごろのかね 小銃穀率』出版の事由：専門書を翻訳した自負、日本の軍事レベルに危機感から時期尚早にもかかわらず、このタイミングで出版
  - ・ 『矢ごろのかね 小銃穀率』を借金までして出版した理由は、はっきりしないが、専門書を翻訳したという自負と、その成果を世に問いたかったのではないかと推測される。
  - ・ もうひとつの理由としては、日本の軍事レベルに対する危機感があったと思われる。

## 5. 軍事改革への関与と建白書

- ① 安政6年(1859)4月、長崎海軍伝習所の閉鎖により帰府。万延元年遣米使節団(咸臨丸乗船)参加を画策も失敗
  - ・ ①赤松はそもそも海軍から陸軍に転身、②それが原因で勝のもとを離れてしまっている、のがダメだった理由として考えられる。
  - ・ さらに、松平忠固が失脚し、もう老中でなかった、つまり幕府中枢にいなかったのが、ダメだった大きな理由と思われる。
- ② 万延元年(1860)3月、上田藩に帰藩し養父赤松弘の病没により赤松家を相続(組付御徒士格)
  - ・ 文久元年に「数学測量世話」、文久2年の7月に「調練調方御用掛」、8月に「西洋流調練稽古仰出」を拝命するなど、軍事方面で非常に要職についていく。
- ③ 【藩政改革意見書】建白をする意義を岩瀬忠震・勝海舟の言動から学んだ可能性
  - ・ 藩政改革意見書のポイントは以下の通りに整理できる。

- A) 世上の形勢を明らかに察すること（京都、江戸を始めとする諸藩の情勢や民衆の動向・世論など）軍事改革の形勢なども十分に探索するという事は、朝廷や幕府の方針を詳しく知ることになり、上田藩の藩政にも資する。
- B) 幕府に準じる同じ行動をするためには、藩士の中から正直で忠義と英才のある人物を2、3人（自分も含む）江戸に時々派遣して、政治動向や軍制などを精緻に探索して計画立案の参考にすべき。諸藩に先駆けて、藩政改革を断行することが急務。
- C) 藩を挙げて軍政改革をするためには兵学者の育成しかない（自分にやらせて欲しいということ）。兵学者の育成が急務であり、藩校に入らせ熟練に至り江戸に派遣すれば2年以内に兵制や器械に精通する人物がどんどん出てくる。また、獲得した軍事技術で兵器を製造することも急務であるということ。
- D) 情報というのは非常に重要。そして、藩も逼迫した財政を改善するために倹約をしないとダメだと言っている。

**・遅々として進まない藩政・軍事改革に強い危機感。一方では、自身の登用を要求**

- ④ 文久3年、松代藩士 白川久左衛門近克の娘たかと結婚。同年4月、妻の実家を訪ねた際、佐久間象山を訪問。対面は1回のみ、手紙の往復、書物の貸し借りを継続。
  - ・佐久間象山との関係については、赤松が象山から影響を受けたか否かは不明。それほど影響を受けていないのではとも思われる。
  - ・但し、あまり人のことを褒めないあの象山が赤松を非常に高く評価している点で、赤松の力量、レベルの高さはうかがうことができる。

## 6. アプリン大尉との出会いと『英国歩兵練法』

- ① 元治元年（1864）9月、幕府は上田藩に第一次長州征伐への出陣を要請。9月12日、小銃・大砲・弾薬の確保のため、急遽江戸行きの命令
  - ・赤松は、馬具類なども購入するために横浜に行く。この時に上田藩士の門倉の紹介でイギリス公使館付騎馬護衛隊長アプリン大尉と知り合い、横浜と上田を往復して、英語、騎兵操練法・騎兵術を学修する。
  - ・このアプリンとの出会いが赤松の人生の中で物凄く大きいことだと思われる。赤松にとっては、**アプリンの出会いというのは、彼がこの後、軍事戦略家として大成をしていくことに大きな画期となった**と考えられる。
  - ・アプリンがイギリス人だったということ自体が、赤松の人生において特筆すべきことだったと言える。アプリンとの出会いの意義は、そこにあると評価。
- ② 慶応元年（1865）1月、長州征伐は解兵、一旦帰藩後、直ぐに再出府して横浜との往復を再開し、アプリンに師事
  - ・この時、イギリスの兵書翻訳を依頼されて下曾根塾に再度入門する。下曾根は『英国歩兵練法』という本を購入して、その翻訳を赤松に依頼する。ただし、赤松も多忙のため一人では無理だということで、加賀藩士の浅津氏と分担翻訳をした。
- ③ 將軍進発（長州再征）のため、上田藩も赤松兄弟を含む1,000人の藩士が従軍。閏5月15日、海路大坂着。従軍中も翻訳を継続、原稿を飛脚便で江戸に送付
  - ・慶応2年3月に、第1編から第5篇になる『英国歩兵練法』が出版された。

- ④ 日本の陸軍の現状に対する危機感を誰よりも抱き、陸軍を近代化して世界に御するレベルに至急引き上げる必要性を痛感。刊行は軍事戦略家としての名声向上に寄与
- ・特に強調したい点は、オランダ式でなく、イギリス式歩兵練法を赤松は初めて翻訳した。翻訳して、刊行した事実というのが極めて重要だということ。本書は、イギリス式の兵学の日本における最初の公式的な存在。赤松が軍事戦略家としてトップランナーだった証拠であり、ここがもう一回、彼を私たちが再評価すべき非常に重要な点だと思われる。
  - ・イギリス式は当時の日本にはなく、赤松が最初だったということ。そして、イギリス式ということになったので、薩摩藩との関係もできる。
- ⑤ 文久3年以降、薩摩藩はイギリスと戦火を交えており、イギリスの軍事に高い関心が集中し、『英国歩兵練法』への高い関心を寄せていたことは疑いなし
- ・薩摩藩は生麦事件から始まって、薩英戦争が起こったため、イギリス軍人、イギリス軍の軍事に高い関心があった。そこに、この『英国歩兵練法』が出たことで、赤松が翻訳した『英国歩兵練法』によって、薩摩藩が赤松に注目するその最初の可能性になったというふうに考えたい。

## 7. 幕府宛建白書（慶応2年8月）

- ① 長州再征の敗北を明言
- ・長州再征の敗北を明言。今回の長州再征の軍備は軍勢を指揮するものの戦略が稚拙である、諸藩は命令に従わず、兵器も兵力も乏しく、兵法が成り立たず。各軍は不一致で、兵の割り当ては不適當で勝算がないことは一目瞭然であると全部言い当てている。
- ② 政事における人材登用の急務
- ・「政事における人材登用の急務」について。ここでは、人選は家柄や禄高に少しも関係がない特別な方法によって、身分の低い者は家臣の家来でもその身一代に限って老中・若年寄といった人選を行っても良いのではないか。能力に応じて高位高禄に取り立てて、国中で知略と身分に整合性を持たせ、人材を選んで政治を行わせれば世の中に波乱は起きないし、国威振張の源になるということである。明治になっても、ここまでの人材登用というのはできておらず、もう現代の人材登用と言っても良いくらいである。
- ③ イギリス・アメリカに準じた陸海軍の創生
- ・「イギリス・アメリカに準じた陸海軍の創生」について。赤松がフランスではなく、イギリス、アメリカを挙げていること。幕府が、少しフランスに傾いていることもわかっている中で、英米を挙げている点が注目される。米国は南北戦争を経て、国際舞台に出てくるところで、英米に目をつけた赤松というのは慧眼であると言える。
  - ・まずは、幕府直属の兵を増やすべし。軍制は世界中の優れた戦法・武器を採用し、特にイギリスとアメリカ両国の制度は精緻で実用的に便利であり、日本の地理や国民性に適している。英国は海洋国家で、米国は当時の新興国。こういった、両国の制度に基づいて整備され、成立している優れた武器をすべて装備して、それぞれの能力に応じた司令官とか、諸官吏を選んで幕府の陸海軍を早急に強くして備えることが急務としている。
- ④ 軍制における四民平等の人材抜擢
- ・次に「軍制における四民平等の人材抜擢」について。諸長官、本当の幹部クラス、つまり上の人たちは、旗本で良いが、それ以下の人、それ以下の長官などは家柄身分は関係ないのだと言って



いる。身分の低い者や家臣の家来、あるいは商人や農民でも学識があれば抜擢して、国中の能力と身分の序列にいささかも違いがないようにすれば、諸軍一致の兵制が確立し、いつ戦争になってもその指揮によって任務を遂行することが可能である。つまり、能力さえあれば関係ないっていうことを言い切っている。

- ⑤ 幕長戦争における幕府の敗北を明言し、幕政における全国レベルでの人材登用、近代的陸海軍の創設、国民軍への四民平等に基づく参加を提言

・幕長戦争、第二次長州征伐における幕府の敗北を明言しているということ。そして、幕府の政治における全国レベルでの人材登用、近代的陸海軍の創設、国民運営の四民平等に基づく参加、政治への参画を求めるということは、譜代藩の家臣である赤松が幕長戦争を実質的に批判していることでもある。そしてこれらの建白は幕府の政治にオール武士層の能力主義による登用を促して、条件付きながら国民皆兵を提言する画期的なものだというふうに見える。

・一方、幕府に対しては極めて不遜な内容。言い過ぎではないかというような内容もあり、上田藩にも害が及びかねない内容もある。

**・軍事戦略家としては、幕府主導の身分制を否定する国民皆兵軍の創生。徹底した能力主義と軍隊の西洋化を提言しているということですね。一方では、自身の幕臣への登用を期待した。大胆極まりなく、上田藩にとっては、赤松の能力を認めながらも、こんな建白を出されたら、ちょっと厄介である。**赤松は、そういう存在としても、認知されていたのではないと思われる。

## 8. 上田藩主松平忠礼宛建白書（慶応2年9月）

- ① 能力主義の徹底と藩主のリーダーシップ

・上田藩主松平忠礼に対する建白書について。能力主義の敵は何か、藩主のリーダーシップとは何か、を説いたもの。前例重視とか融通が利かない、そういう法令・法律や取り決めは、もうすべて廃止すべきである。身分の上下による藩士の隔たりも廃止すべきである。軽輩の者であっても言路洞開となるよう改め、そういう雰囲気を作れということ述べている。

- ② 藩主自らの軍学修学・軍政改革

・藩主自らの軍学修学・軍制改革について。若い藩主自らも軍学を学び、軍制改革に励むべきということ。すでに近頃、兵制や軍事訓練を私（赤松）に頼みに来た他の藩主の中には、若い藩主であっても自ら西洋諸国の兵書を調べ、洋書で学び、軍事訓練の指揮をとって兵制改革などを実施しているということであるので、あなたもそうしなさいと言っている。

- ③ 若き藩主（17歳）主導による徹底した早急な藩政改革

・松平忠礼は、松平忠固の次だが、17歳の藩主に対して、藩主主導による徹底した早急な藩政改革を要求してこの建白を閉じている。

- ④ 藩主に対して遠慮がない諫言的建白書

**・能力主義の徹底を求めて、英明な藩主がリーダーシップを遺憾なく発揮しながら、率先して藩政改革の実行を要求**している。下級藩士が上申する内容としては極めて不遜で過激と思われ、藩要路の警戒を受けたのではないだろうか

- ⑤ 「既に近来私え兵制練兵の儀御頼みにて御出入り仕り候諸侯」「御直々御尋ねに相成り候はゞ万国の法則及び日本列藩の形勢等、委細に申し上げ奉るべく候」

- ・前藩主の松平忠固だったら、このような改革をやったかもしれないという可能性を少し感じる。  
それ以前に、赤松をもっと登用していたかもしれない。

## 9. 幕府仕官の失敗と上田藩との関係

- ① 幕府仕官を志向し、幕府宛建白書（慶応2年8月）を作成。仮説の域を出ないが、下曾根金三郎に仲介を依頼して幕臣（陸軍所歩兵差図役または講武所砲術教授方）への登用企図
  - ・慶応2年11月に、幕府は上田藩に対して開成所教授手伝出役として赤松の出向を要請。譜代藩に対して、幕府への出向を依頼したにもかかわらず、驚いたことに上田藩は拒否しており、これが、私には非常に不思議に思える。
  - ・譜代藩にとっては、藩士の幕府への登用はむしろ光栄なことのはずなのに、上田藩は拒否している。赤松は、藩の枠を超えて活躍することを期しており、幕臣になっていく可能性もあり、藩の側では何らかの不信感があった可能性もある。藩主にこんなこと言ってしまったとか、反対してこんなことを建白するな、というように、赤松の才能に対する嫉妬みたいなものがあったかもしれない。
- ② 上田藩との複雑な関係一柔太郎宛書簡（慶応3年3月10日）
  - ・この頃、兄の柔太郎との書簡では、「結局、上田で事を起こし、それを日本中に知らしめることは不可能であるが、日本で事を起こせば自然と上田藩でも事を起こせるはずである」という趣旨のことを書いている。つまり、幕府に登用されて、幕府の仕事をしたい。上田藩で何かしたとしても、それは上田藩のことでしかない。要は、上田には不帰、京都に留まりたいという意味であると考えられる。表向きは、もう痔のために動けませんということにして、上田には帰れませんという意味である。
  - ・幕府への仕官は叶わないということなので、会津藩の藩校洋学所と薩摩塾を同時に掌るのだと言っている。この頃から、赤松は軍事戦略家として会津藩や薩摩藩などの大藩に依拠した活動を重視するというふうに変わったとみられる。
- ③ 幕府への士官は叶わず、会津藩の藩校洋学所と薩摩塾を同時に掌ると伝え、上田藩を見限って帰国命令に反して痔疾と仮病を使って滞京。そもそも、上田藩での立身出世は不可能であり、かつ幕府出向を拒否する藩に絶望感。藩を軽視した在京活動を展開
  - ・上田藩に対する怨嗟とも言えるような恨み節で、軍事戦略家としての登用を断念するという内容の兄の柔太郎宛書簡が残っている。
- ④ 上田藩周旋方就任への期待
  - ・この頃に、上田藩にとどまりながら、周旋なら京都周旋方に就いて、在京資格を得ながら、他藩士とも一緒になって国事周旋を実行する。そういう方向に転換したのではないかというふうに思われる。

## 10. 家塾・薩摩塾の誕生と「重訂英国歩兵練法」

- ① 家塾（天雲塾との呼称あり）の開設時期には諸説あり。兄柔太郎宛書簡（慶応2年10月26日）は断片しか現存しないが、そこは記載がなく、肥後藩から英式兵学、会津藩から蘭書翻訳依頼の記載あり

・家塾の開設を上田藩が許可した段階で、もう赤松を上田藩は使う意思がないことがわかる。それなら、赤松としては、塾を運営しながら、幕府や大藩への戦略家としての仕官を模索する方向を検討することになる。

- ② 下曾根塾の後輩に当たる薩摩藩士野津道貫の推薦によって、薩摩塾を開設。
  - ・薩摩塾については、下曾根塾の後輩である薩摩藩士の野津道貫が推薦して、薩摩塾を開設したことは間違いないと思われる。開設の時期は、史料によれば、慶応3年3月10日から3月末までの間になるのではと、現段階では推測している。そして、家塾を薩摩藩邸内に移設をして一本化する。
- ③ 薩摩塾は他藩の希望者も入塾可能、薩摩藩士約50名のほか越前藩士、大垣藩士等が入塾。授業科目は英国式兵学（歩兵、騎兵、射撃）、西洋戦史、航海術、算術等、英語等
  - ・授業科目は、英国式兵学はもちろん、西洋戦史、航海術、算術、英語まで教えていた。そして、この塾生には初代塾頭の野津道貫、二代目の塾頭が野津鎮雄で、桐野利秋、村田新八等々の明治時代の海軍・陸軍のリーダーに成長する人たちがいた。薩摩藩のこういった明治以降に軍人として活躍した人たちが軒並み赤松門下でいるということ
- ④ 慶応3年（1867）5月、「英国歩兵練法」（1864年増補改訂版）の原書を翻訳した「重訂英国歩兵練法」（薩摩版）を刊行。全7編9冊、表紙の色から「赤本」と呼称
  - ・慶應3年5月に、「英国歩兵練法」の改訂版が出ており、その原書を薩摩藩の依頼で刊行した。赤松単独による翻訳とみられる。
- ⑤ 薩摩藩がどのタイミングで依頼をしたか不分明。酒井十之丞書簡（慶応2年11月16日、毛受鹿之助宛）には、「赤松は何程の者に候や元来薩より差留置候もの故、今朝青山小三郎を遣し篤と探索を為致候事」と記載
  - ・刊行は四侯会議でやってきた島津久光の上京に合わせた可能性が高い。赤松は、久光から最新の騎兵銃を拝領している。この段階で、薩摩藩と赤松さんは蜜月状態であったとみられ、薩摩藩への仕官の可能性も否定できない。そういう時期であったかと思われる。

## 11. 幕府・越前藩・薩摩藩への「建白七策」

- ① 四侯会議開催に合わせ、慶応3年5月に幕府（徳川慶喜）・薩摩藩（島津久光）・越前藩（松平春嶽、5月17日）に提出
  - ・幕府・越前藩・薩摩藩への「建白七策」については、四侯会議に合わせてこの建白が出されたというタイミングが非常に重要。
  - ・この建白が出されたのは慶応3年5月で、幕府の徳川慶喜、薩摩藩の島津久光、越前藩の松平春嶽宛で、越前藩には5月17日に出した。土佐藩と宇和島藩には提出していないが、この三藩に出しておけば伝わるだろうと思っていたとみられる。
- ② 幕長戦争での幕府・譜代連合の敗退（+上田藩の無関心への嫌気）を機に、幕府主体の身分制解体を前提とする国民皆兵の欧米的近代軍隊の創世に見切りを付け、この段階から幕府と西国雄藩、特に薩摩藩との融和による実現に方向転換
  - ・このタイミング（慶応3年5月）に建白を出した背景としては、前年に幕長戦争で幕府・譜代連合が敗退、上田藩の赤松に対する無関心への嫌気、それを機に赤松の中で幕府主体の身分制解体を前提とする国民皆兵の欧米的近代軍隊の創生に見切りを付けたとすることがあると考えられ



る。この段階からは幕府と西国雄藩、特に薩摩藩との融和による実現に方向転換をしたのではないかと思われる。

- ・そして、譜代小藩の上田藩士であるため、やはり幕府を排除できず、幕府と一緒に西国雄藩の連携ということが前提になって行く。特に、幕薩融和を意識した行動が、ここで始まったのではないかと考えられる。
- ③ 内容は多少の異同があるにしても、基本同一と見なせるもので、直筆が残存する薩摩藩宛をベースに検討することが肝要（越前藩宛について、『続再夢紀事』は誤植の可能性があり、薩摩藩側の『忠義公史料』4（史料番号 426）の「雇教師赤松小三郎<松平慶永宛>」の使用がベター）
  - ・幕府宛ての建白書は11月に盛岡藩が写しを入手している。鳥取藩の記録にも、建白の写しを手に入れているという記載がある。これらから判断すると、相当広い範囲に赤松の建白書が流布していることは間違いないだろう。
- ④ 内容の吟味、その他の構想との比較については諸書に譲るが、『西洋事情』を参考に日本にカスタマイズしたものであり、大同小異ながら同様な構想はある程度共有
  - ・赤松の建白の価値は、これを明文化した、この構想を初めて文章化したということが、極めて重要であるというふうに思う。
  - ・しかも、この四侯会議のタイミングで出すという非常に政治的なセンスというものを感じる。

## 12. 会津藩との関係と「幕薩一和」

- ① 慶応2年（1866）11月、会津藩が赤松の英国式兵学に興味を示し、銃隊調練稽古を依頼
  - ・慶應2年11月に、会津藩が赤松の英国式兵学に興味を示し、会津藩士の山本覚馬が赤松に銃隊調練稽古を依頼する。
  - ・山本覚馬の依頼を受けて、赤松は会津藩が設置した洋楽所顧問に就任。同時に西周も就任しており、西周と赤松は当然関係があるとして良い。
  - ・重要な点は、単なる顧問だけではなくて、実際の調練もやっているということ。
- ② 会津藩による引き留め工作—柔太郎宛書簡（慶応3年7月16日）
  - ・このころ赤松が兄に宛てた手紙では、会津藩は赤松の在京を求めており、幕府や京都留守居役に帰藩させないでほしいということを要請。上田藩にも書面でそれを要請していると書いている。
- ③ 会津藩の真意について、「京阪御用状往復留」（上田藩庁文書、6月29日付上田藩留守居代赤座寿兵衛書簡、岡部九郎兵衛他宛）によると、会津藩（公用人 外嶋機兵衛）から赤座および留守居役山田貫兵衛に対し、引き続きの軍事調練の担当を依頼
  - ・合わせて、会津藩側は、薩摩藩にも軍事朝練等を赤松は行っていることから、近頃諸藩と付き合いを控えてその動向が把握できずに何を考えているか分からない薩摩藩の動向探索を、赤松にやってほしいのだと。それが徳川家および譜代藩の利益になるといている。
  - ・要は、会津藩から上田藩に対して赤松にスパイをさせて欲しいという話で、薩摩藩の情報が全く入らないので薩摩藩の情報を赤松から知りたいという趣旨
- ④ 上田藩・赤座の反応
  - ・これに対して上田藩の留守居代の赤座は、赤松は薩摩藩と接点があるのは都合が良いし、会津藩の公用人からの話があるので、会津藩の意向に沿ってしばらくの間はそのまま赤松を京都に居させた方が良いのと答えている。

- ・万が一、薩摩藩にスパイが漏れると不都合なので、赤松本人にはスパイをしろとまでは伝えないで、会津藩公用人に赤松を当分預ける格好にしておこうとしている。
- ・重要な点は史料の中で、赤松は身分不相応なことに尽力している。赤松は本来やるべきこと以外のことをやっている。不都合なことではあるけれども、これも今の形勢から仕方なく放置していたのだ。とされている点。上田藩の在京要路の人たちは、会津藩の要請を受け入れて赤松の滞京を認めることを国元重役に打診し、赤松の周旋活動を苦々しく感じていながらも、譜代藩として会津藩への協力を画策をしているということである。

#### ⑤ 幕薩融和の周旋の実態

- ・幕薩融和の周旋の実態については、兄・柔太郎宛ての書簡と、山本覚馬の文書に記録がある。まず、兄に対しては、幕薩一和の端緒を開こうと考え、薩摩藩側では西郷隆盛に掛け合い、幕府側では会津藩公用人（恐らく山本覚馬）、梅沢孫太郎、永井玄蕃公などにも幕薩一和を説いており、少しは成功の見込みが出てきているという内容。
- ・この幕薩一和運動というのは、幕末政治における画期的な出来事のひとつであると思う。これが形を変えて大政奉還運動に連動していくことで、大政奉還後に慶喜が奉還をしたことによって薩摩藩の中でも考え方が割れてくる。
- ・その小松帯刀や坂本龍馬による政体構想、つまり幕府の機構を一部残す、幕府の要人も取り込むということが、慶喜をどうするかという問題にもつながってくる。この運動は、そういう問題にも接続していることだとして、幕末政治史において位置づける必要があるのではないかと思う。幕薩一和運動というものがその後の政局に、影響を与えるという意味においてここは評価すべき。

### 13. 赤松暗殺の実相

- ① 上田藩による帰藩敵命により、一旦帰藩する決心。薩摩藩にスパイと見なされ、慶応3年9月3日16時頃、京都東洞院通で薩摩藩士桐野利秋（中村半次郎）、田代五郎左衛門によって暗殺
- ② 桐野は探索を任務としており、赤松の挙動を監視してスパイと断定。確かに、会津藩から上田藩に赤松をして探索させる依頼をしているものの、実行したかどうかは不分明
  - ・桐野は、スパイを取り締まり、つまり探索を任務としており、赤松の挙動を監視していて、スパイであると彼は断定した。確かに、会津藩から上田藩に赤松をして探索をさせる、スパイを依頼しているわけだが、赤松が実行したとの証拠は何もない。ただし、赤松は幕薩一和を考えて周旋活動をしているわけですから、当然、必要に応じて薩摩藩の情報を幕薩一和のために開陳している可能性がある。
  - ・赤松はスパイをしているという意識はないが、薩摩藩の情報を相手にあげることによって、薩摩と協力して行こうぐらひは言っている可能性あり。これが、嫌疑を受けたと可能性も。
  - ・あるいは、桐野が、会津藩からあの上田藩にこんな依頼が行っているって事をどこかで掴んだということもゼロとは言いきれず、もしそうなら、会津藩の依頼を断れなかった上田藩という点で、上田藩士であった赤松、上田藩というところの悲劇であったと言える。
- ⑤ 桐野は単独で動ける権限を有していたと考えられるが、事前に西郷に告知していた可能性あり。なお、最低限、桐野は事後報告していたはずであり、薩摩藩（少なくとも要路）はその事実を共有か

- ・桐野は単独で動ける権限は有していたが、西郷に最後には、暗殺の事実を伝えていた可能性はある。最終的には、最低限、桐野は西郷にやったことは言ったのではないかと思われる。
- ・事前に西郷の許可を取ったか、取らなかったかは分からないが、桐野は少なくとも、その後、隠し通している。

#### 14. 幕末政治と赤松小三郎

赤松をどういうふうにも幕末政治の中で位置づけるべきなのか？

- ① 赤松小三郎の評価を、「建白七策」の先見的な内容からアプローチし過ぎることを避け、政治（変革）家としての立場を過度に強調することを控え、まずは英式兵学を我が国に最初にもたらした軍事戦略家の側面を高く評価すべきであり、軍事史学における赤松の再評価を期待する。
  - ・赤松小三郎の評価で、「建白七策」の先見的な内容からアプローチし過ぎることは避けた方が良い。
  - ・政治変革者、政治家としての立場を過度に強調することを控えて、まずは英式兵学を我が国に最初にもたらした軍事戦略家の側面を高く評価すべきであり、軍事史学における赤松の再評価を期待している。
- ② 「建白七策」について、譜代小藩の上田藩士であるため幕府を排除できず、幕府と西国雄藩の連携、特に幕薩融和を意識し四侯会議に合わせて建白をしており、こうした構想を日本で初めて明文化したことが極めて重要であり、このタイミングで建白した政治的センスに重きを置くべき事象と位置づける
  - ・「建白七策」については、譜代小藩の上田藩であるために幕府を排除できず、幕府と西国雄藩の連携、特に幕薩融和を意識し四侯会議のタイミングに合わせて建白した。
  - ・こうした構想を、日本で初めて明文化したことが極めて重要である。
  - ・また、このタイミングで建白したという政治的センスに重きを置く事象である。
- ③ 「幕薩一和」運動について、幕末政治における画期的な事象であり、実は形を変えて、大政奉還運動に連動し、更には大政奉還後の小松帯刀や坂本龍馬による政体構想に接続したと考える。この周旋活動は、幕末政治史における極めて重要なものと判断する。
  - ・幕薩一和は、幕末政治における画期的な事象である。形を変えて、大政奉還運動に連動して、さらに大政奉還後の小松帯刀や坂本龍馬の政体構想に接続したのではないかと考える。
  - ・私は今、慶應義塾の薩摩藩の研究を行っているが、赤松の考え方も少しわかったので、これも次に研究の中に生かしていきたい。
- ④ 赤松小三郎の非業の死は、日本軍事史において痛恨事であるとともに、政治史においても有能なインストラクターを喪失したと断言しても、過大評価にはならないと確信する。
  - ・赤松の非業の死というのは、まず、日本軍事史において痛恨の出来事。赤松はもし暗殺されなければ、欧米に留学し軍事を学んで帰ってきて、日本の陸軍などの専門家として、非常に大きな足跡を残したと思われる。
  - ・政治史においても、有能なインストラクターを喪失したという点が非常に残念である。彼が生きていれば殖産興業や、富国強兵の局面での活躍が見られたかもしれない。

(結び)

以上、赤松については人生を俯瞰しながら、赤松の再評価ということで、現時点での結論を述べさせていただきます。

## II. 赤松小三郎と佐久間象山たち（報告者：芦田雄樹さん）

### <報告の要旨>

#### 1. はじめに

幕末の信州・上田出身の赤松小三郎と、信州・松代出身の佐久間象山の関係性について先行研究で深く考察されている様子がないこと、また赤松の関係者に象山の関係者（象山本人を含む）が多く見られることなどから、関係性は注目しておくべきと考え、両者（グループ）の関係性を考察した。

<以下、今回の発表の内、ここでは上記（赤松と象山の両グループの関係性）に絞ってまとめましたので、ご了承ください（記録者）。>

#### 2. 赤松関係人物紹介～（ ）内は赤松小三郎との関係性

- ・芦田柔太郎（実兄）、勝海舟（師）、佐久間象山（文通相手）、松平忠固（主君）、松平忠礼（主君）、東郷平八郎・野津道貫ら（門下生）、櫻井純造（蔵）（文通相手、同郷）、瀧沢省吾（文通相手、同郷）、八木剛助（文通相手、同郷）、青山貞（文通相手）、山本覚馬（仕事仲間）、西周（仕事仲間）、南郷茂光（仕事仲間）、堀直虎（門下生、須坂藩主）、内田弥太郎（師）、下曾根信敦（師）、植村重遠（師）、桐野利秋（門下生、暗殺者）

以上、赤松小三郎の関係者の中に、佐久間象山本人を含む、象山関係者が複数いることが確認できる。しかし、先行研究では、赤松と佐久間について深く言及されているものがないのは、赤松と象山が親しく対面して話したのは一度だけ、と言われている影響か。

→【仮説】赤松は西洋砲術をはじめとした洋学を学んでいる。象山・象山関係者も、赤松の思想や活動に少なからず影響を与えている、と考えていいのではないか。

#### 3. 象山・象山関係者と赤松の関係時期～<内容は省略（記録者）>

- ・佐久間象山①（文久3年、対面）、佐久間象山②（文久3年4月28日、象山から赤松への書簡）、佐久間象山③（文久3年6月4日、象山から赤松への書簡）、佐久間象山④（文久3年9月、加藤某宛書簡）、佐久間象山⑤（文久3年10月16日、赤松宛書簡）、勝海舟①（元治元年11月18日、対面）、勝海舟②（慶應2年10月3日、対面）、山本覚馬①（慶應3年ころ、依頼）、山本覚馬②（慶應3年6月、上申書）、山本覚馬③（慶應4年6月、意見書）、櫻井純造（蔵）（年代不明7月19日、赤松宛書簡）、八木剛助①（文久2～3年ごろ、協力）、八木剛助②（年代不明・正月、赤松宛書簡）、八木剛助③（年代不明・正月、赤松宛書簡）、下曾根信敦①（嘉永5年、入門）、下曾根信敦②（慶應元年2月20日、再入門）、下曾根信敦③（慶應2年、推薦）

<以上からの考察>

#### 佐久間象山

- ・対面や書簡のやり取りの記録があるのは、全て文久3年。
- ・むしろ象山が赤松から学ぶところが多かったとも言われているが、あくまで赤松が象山を訪ねて対面が実現している。

- ・公武合体による幕府権力強化によって国家を富強し、外圧に対抗というのが基本的態度で、政治的・社会的秩序の保持は、科学技術を受容して国家の独立を保つ、という象山の命題とセット→赤松と類似性が見て取れる。

#### 山本覚馬

- ・赤松は会津と薩摩の関係を取り持つ役→赤松は談判できる力を持つとして、山本からの信用が厚かったことがわかる。
- ・山本が薩摩へ提出した「管見」は先行研究において、議会政治、三権分立、殖産興業など、赤松と重なる部分が多く、関良基氏は著書の中で「小三郎の志は盟友の覚馬に継承された」としている。

#### 櫻井純造（蔵）

- ・赤松と軍備などについて書簡のやり取りをしている。書簡の年代が特定できないが、内容から類推して年代が分かれば、関係性のヒントになるか。

#### 八木剛助

- ・書簡の判読は現段階では困難だったが、赤松が上田で働いていたころ、ともに政治活動に力を入れたキーパーソンである可能性がある。
- ・赤松が文久3年に「藩政改革の意見書を提出した」（下書きがあるが、実際には藩当局へ提出したかは不明、という見解もある）とされていて、これを赤松の政治活動の端緒とするなら、この年の動きや八木との関係は重要なポイントになる。この頃の赤松は藩の兵制の様式化に努めており、兵学の観点から政治情勢を憂慮した、と言える可能性がある。

#### 下曾根信敦

- ・赤松を幕府宛に推薦するなど、赤松を大変評価しており、深い付き合いがうかがえ、数多くの門下生の中でも、赤松は存在感があったと推測できる。

#### 4. まとめ

- ・赤松小三郎は、数学者、兵学者としてスタートし、「兵学者」として「象山グループ」と関わっていることが多く、また、政治思想家として活動を始めるきっかけや思想にも、「象山グループ」が関わっている可能性を示した。これは、赤松が政治活動を始めた理由や、赤松の思想の源流を考察するうえで、必要なプロセスであったと考える。また、赤松の活動の毛色が変わる画期・きっかけを探るヒントになった。

#### <その他>

##### 1. 赤松小三郎研究会設立10周年記念事業等の実施状況の報告

- ・ 報告者：滝澤進会長
- ・ 概要：設立10周年記念事業等の実施状況について、説明が行われた。
  - (1) ホームページの立ち上げ～昨年12月より上田高校関東同窓会ホームページ上で情報発信中
  - (2) 赤松小三郎研究会設立10周年記念講演会の開催～2023. 11. 26（土）



- (3) 赤松小三郎研究会設立10周年記念エッセイ賞の募集・表彰
- (4) 赤松小三郎研究会例会における幕末史特別公演の開催～2023. 10. 14
- (5) マスメディアを通じての情報発信（検討中）
- (6) 赤松小三郎研究会設立10周年記念誌の編集（検討中）

## 2. 「赤松小三郎エッセイ賞」について報告

- ・報告者：荻原貴
- ・概要：全国から22作品の応募があり、応募者の年齢は7歳から86歳まで幅広い年代であった。2023年11月26日に開催された第10回赤松小三郎講演会の終了後、受賞者の表彰が行われた。  
募集趣旨である「赤松小三郎について幅広い関心を高めるとともに、その事績の理解に寄与する」ことに貢献できた。

（記録：荻原貴）